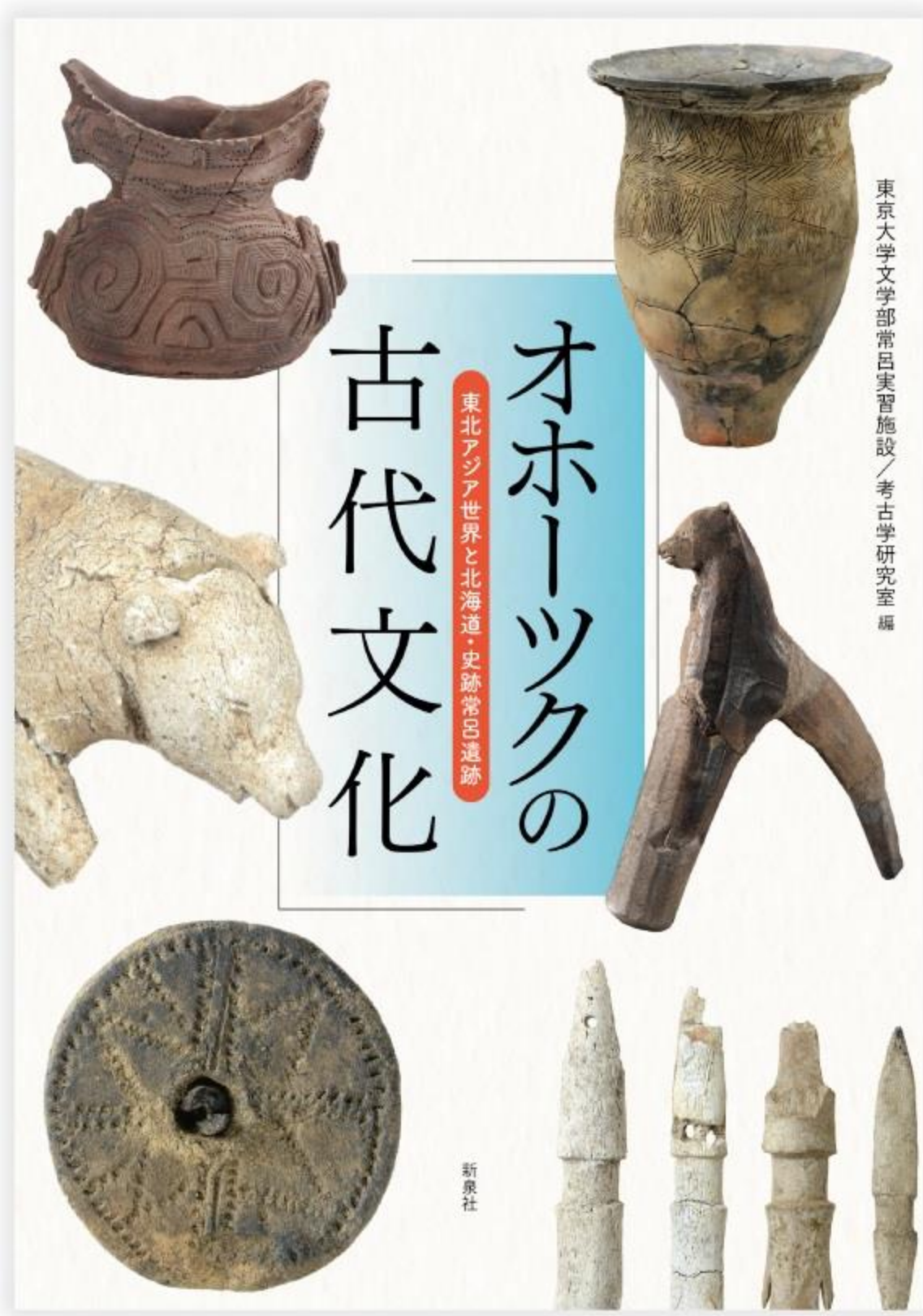


オホーツクの古代文化

東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡

海を越えていくつもの文化が交錯し発展を遂げたオホーツク海沿岸の地は、北海道の歴史を考える上で欠かすことのできない遺跡が数多く見られます。本書では、史跡常呂遺跡を中心としてオホーツクの古代文化を追究した東京大学常呂実習施設50年の歩みとともに、住居跡、狩猟・漁労具、人骨、土器のおこげなど、様々な資料を駆使した最新の研究成果を紹介します。



A5判 216頁 定価 2300円+税 / ISBN 978-4-7877-2401-4 C1021

北の海に暮らした
古代人の足跡

東京大学文学部常呂実習施設／考古学研究室編

第1章 北の海に暮らした人びと

旧石器文化／縄文・続縄文文化／道東部のオホーツク文化／擦文文化からアイヌ文化へ

【コラム】黒曜石製石器／弥生化と続縄文／銚頭／常呂川下流域の擦文集落 ほか

第2章 東北アジア世界と北海道

東北アジアからみたオホーツクの古代文化／常呂川下流域の古環境／形質人類学からみた北海道の先史／動物遺体からわかる生業や環境／常呂の遺

跡と食生態分析／北方漁労民の技術／アイヌ文化のクマ儀礼の起源をめぐって／東アジアと常呂の青銅器 【コラム】ロシア極東の遺跡を掘る

第3章 東北アジア考古学と常呂

東京大学と東北アジア考古学／東京大学と常呂の出会いとあゆみ／常呂実習施設の発掘調査の歴史と研究成果

【コラム】駒井和愛と渤海国の考古学研究／常呂研究室草創のころ ほか

第4章 常呂の遺跡とともに

大学と地域連携 東大文学部と常呂実習施設の取り組み／文化財の保存活用と地域連携／世界遺産と地域連携／史跡常呂遺跡の整備／ところ遺跡の森案内 【コラム】東大とのおつきあい



目次の詳細をご覧になりたい方はこちらからアクセスしてください。

新泉社

近代国家の政治・経済・文化の枠組みからみれば、ここは「さいはて」であり、国家に組み込まれる前にも類似した側面はあったかもしれない。しかし、そこは単なる辺境ではなく、先史の時代より北と南から異なる文化的背景をもつ人びとが交流する接点でもあった。東京大学と地元関係者、両者の熱意によって開設された実習施設に冠された「北海文化研究」の名称には、研究のまなざしをオホーツク海とその遙か北方まで広げる決意が込められていたはずである。それから半世紀あまり、文部省の認可を経て正式に設置されてから五〇周年を迎えるにあたり、常呂実習施設を拠点として進められてきた東北アジア考古学の研究の成果とその意義を伝えようと刊行されたのが本書である。 ——「本書のねらい」より

知られざる北の古代文化を追究した、 東京大学常呂実習施設50年の歩み



最新の研究成果を盛り込んだ北海道の考古学を紹介

第1章では考古学からみた北海道の歴史（旧石器時代～アイヌ文化期）を概観し、第2章では幅広い分野・地域に目を向けた各論を紹介。第3・4章ではこれまでの研究の歩みと地域連携を通じた今後の研究活動のあり方について考えます。



トピックごとの掘り下げ

各章のコラムでは、トピックごとに内容を掘り下げています。第1章ではオホーツク沿岸地域ならではの出土資料を多く取り上げ、研究成果を紹介しています。

執筆者

- 熊木俊朗 (東京大学)
- 福田正宏 (東京大学)
- 山田 哲 (北見市教育委員会)
- 中村雄紀 (北見市教育委員会)
- 夏木大吾 (東京大学)
- 太田 圭 (東京大学)
- 根岸 洋 (東京大学)
- 設楽博己 (東京大学名誉教授)
- 高橋 健 (横浜ユーラシア文化館)
- 塚本浩司 (大阪府文化財センター)
- 榊田朋広 (札幌市埋蔵文化財センター)
- 大澤正吾 (文化庁)
- 市川岳朗 (北見市教育委員会)
- 佐藤宏之 (東京大学名誉教授)
- 一木絵理 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場)
- 近藤 修 (東京大学)
- 新美倫子 (名古屋大学)
- 國木田大 (北海道大学)
- 鈴木 舞 (山口大学)
- 森先一貴 (東京大学)
- 中村亜希子 (独立研究者)
- 菊池徹夫 (早稲田大学名誉教授)
- 飯島武次 (駒澤大学名誉教授)
- 宇田川洋 (東京大学名誉教授)
- 大貫静夫 (東京大学名誉教授)
- 米村 衛 (網走市立郷土博物館)
- 新谷有規 (株式会社しんや)